

私の稀観本ノート

その31

○ 画文帖、釣れづれの四季
(平凡社) 矢口高雄著
椎窓 猛



去る6月20日、上京、それから足を伸ばし、「釣りキチ三平」のまんがで高名な矢口高雄さんの故郷秋田増田町のまんが美術館を訪ねた。私たちのNPO世界

子ども愛樹祭コンクールの選考委員でもある矢口さんから、「いちど見に行ってください」とすすめられていたものでもあった。矢口さんはまんがで郷里を描くのみならずエッセーでも「ボクの学校は山と川」など、少年の日の思い出を綴り、教科書にも採択された文章がある。

さてまんが館は矢口さんの作品のみならずわが国の代表的なマンガ家が紹介されていた。すばらしい特色豊かな文化施設である。この売店で、「釣れづれの四季」を求めた。美しい絵と詩でつづられた北国の風物誌である。

黄櫨の会・自分史図書館だより



や

No. 31

2007.7.10

平成19年7月10日 筑後市野町428-8
〒833-0032・TEL 0942-53-8122

これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歓のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

○ 鳥栖市誌研究編 第5集
汽笛の記憶
鉄道員のオーラル・ヒストリー
鳥栖市誌編纂委員会
中村尚史 編



「本研究の主たる目的は、佐賀県鳥栖市域で日本国有鉄道勤務を経験された様々な職種と世代の方々を対象に、鉄道員の

仕事と意識に関する聞き取り調査を行い、戦前から戦後にいたる鉄道の作業現場の内容とその変化を明らかにするために」編纂された重量感あふれる鉄道史料である。「汽笛の記憶」という誌名が郷愁を呼びさますような、詩情の題名である。

オーラル・ヒストリーとは、口述史。したがって、機関車とともに働きたいわゆる鉄道員への聞きとり、鉄道入職のいきさつから、現場の状況、楽しい思い出、苦しかったことなど、鉄道史のなかにふくまれる自分史とでも言えるような珍しい史料で感銘を覚えた。

心の小径

しらのあらた

夏
の
記
憶
ひ
ま
わ
り
畑
の
蜜
蜂
は
昼
げ
時
の
来
訪
者
長
居
し
て
複
眼
の
緑
に
夏
を
映
し
て
い
る
ひ
ま
わ
り
畑
の
幼
子
は
父
の
肩
車
背
伸
び
し
て
空
の
青
に
手
を
染
め
て
い
る



(文章歩道より)

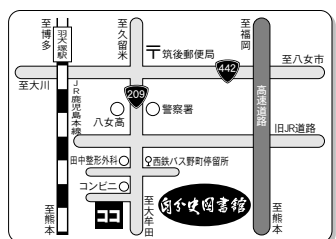
受贈図書紹介 ㊦

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。
あしからずご了承下さい。

泣いても笑ってもまたあした……堀江 悦子 柳川市
自ら発光体となろう……古庄ゆき子 別府市
私は女教師……原田 八重 志摩町
市制施行50周年記念写真集……大川 市
故郷の花……小郡市郷土史研究会
ステンドグラス川島政則の世界……川島 政則 福岡市
ローカル線紀行・駅の表情上・下巻……遠城寺宗知 福岡市

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話で
ご確認下さい。
貸し出しはしていません。



〒833-0032 筑後市野町423-8 TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitosyokan



○こころの摘み草
稗田チヅ子著

有明新報社編集協力

贈呈、四季おりおり、自然の中に心をあずけ、目にとまったものを思いのままに綴ってみました。「こころの摘み草」を育てていただいた皆様方に、心より感謝申し上げますと、著者。出版を祝して、「まどかぴあ」の林田スマ所長さんは、「幼い頃の思い出、ふるさとへの郷愁、風ささやきに憩うこと……巡る季節の中に立ちどまって耳をすますことの大切さをこのエッセイに学びます」『お便り』の会編集長左座富美子さんは「美しい夕映えの中に立つ稗田さんの姿」を読むと賞讃されている。



○幻炎
島田真祐著（弦書房刊）

島田真祐氏は1940年、熊本市の生まれ。1977年に財団法人島田美術館を設立。そのかたわら歴史小説を執筆。「身は修羅の野に」は熊日文学賞を受賞されている。

この「幻炎」は、肥後加藤家改易、近世、寛永期の時代、清正のかたわらにあった功臣の子孫から細川家の移行、その時代のきびしい変転を背景に連歌師などの登場で興味深い物語。「去る年の花の替わりか師走雪」と口ずさむ西山次郎作は首をふるしぐさの描写など得難い味わいである。

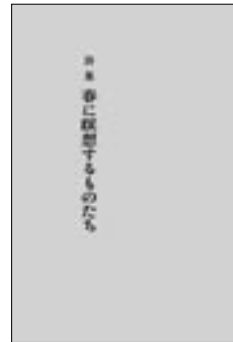


○たった一冊の詩集
須永博士著（七賢出版）

須永さんは、東京日本橋生まれだが、1994年、熊本阿蘇郡小国町に「須永博士作品館」を設立、しか

し日本各地を放浪、個展と講演を催しながらの旅をつづけられている。

この詩集は写真と絵と詩で織りなされた内容で、それぞれに山頭火を連想させる色あいがあって味わい深い。



○詩集「春に瞑想するものたち」
上村育也（東兄弟印刷）

・1986年4月発行の詩集だから昭和晩年、ざっと20年前の刊行。上村さんとは、久留米で、たしか丸山豊先生のところかで出会っている。一冊の詩集がひっそりとした「自分史図書館」の書棚で呼吸しているのを発見した。（しいまど）

ある朝
起きだしてみるとなんと
よい朝があるもので
それは月曜日であるうと
薄曇りであらうと
カーテンの揺れはメロディを歌っている
きつと心のどこかでは
消えてしまいたいなどとも思っているのだ

編集掌記

▼6月29日、久しぶりに野町の『自分史図書館』に出勤。誰もいない深閑としている。館長の机上に、四、五冊の新しい献呈本。思いがけないところから、

見知らぬ方の、あ、あの方の本が——と、いつも出会いのよるこびが手にとるたびにわきあがって有難く思ふ。

▼「こころの摘み草」と題されたエッセー集を刊行の稗田チヅ子さんは、「文集お便り」に寄稿されていて、誌上ではよく目にとまっていた方である。編集長の左座さんが「出版に寄せて」と序文を寄せられていて、一夕の感銘を覚えた。▼「季刊文章歩道」はいつも恵贈を受けているが夏号は50号記念号。詩人高木護さんの「乾杯から」を読めば、50号・12年半の歩みが回顧されている。高木さんは雑誌を發行していくことの多難多事について述べられている。「Ya」や「黄檗」の編集を受けもって持続している身、立場から共感されること多し。

（自分史図書館長 椎窓）

